

# 1

## ゲルマン諸民族による 西ローマ帝国の解体と東ローマ帝国

286年にディオクレティアヌスはローマ帝国を東西に分割。自身を東方担当の正帝とする一方、マクシミアヌスを西方担当の正帝とし、ガレリウスとコンスタンティウス・クロルスそれぞれ東西の副帝に任じました。やがてコンスタンティヌス一世は東西を統一しましたが、同帝の死後、ローマは再統一と分裂を繰り返し、テオドシウス一世死後、395年にローマ帝国は西ローマ帝国と東ローマ帝国に分裂してしまいました。

その後いわゆるゲルマン民族の大移動が起こると、476年、ゲルマンの傭兵隊長オドアケルによって皇帝アウグストゥルスが廃位され、西ローマ帝国は滅亡の憂き目に遭います。そして帝国領は、ゲルマン諸民族の勢力分布に従って解体され、イタリアは東ゴート王国、北イタリア地方はフランク王国、ローヌ川流域地帯にはブルグンド王国、南フランスとスペインは西ゴート王国、北アフリカはヴァンダル王国が分立することになります(図5)。



図5 526年のヨーロッパ

一方、コンスタンティヌス一世が古代都市ビザンティオンの跡に建設した新しい都コンスタンティノポリスは、330年にローマ帝国の首都とされ、西ローマ帝国滅亡後もキリスト教国ローマの中心として発展します。この国はギリシア文化を色濃く吸収し、コンスタンティノポリスが古代都市ビザンティオンの跡に建てられたことに因んで、「ビザンティン(ビザンツ)帝国」と呼ばれるようになります。「ギリシア帝国」と呼称されることもあります。また、当初のビザンティン帝国の版図には、アレキサンドリア、アンティオキア、エルサレムなど古代キリスト教の中心地が含まれており、初期の公会議(全地公会)のすべてが東ローマ帝国内部の都市において開かれました。コンスタンティヌス大帝が始めたキリスト教を国教とする帝国

は、実はこのビザンティン帝国であったと言えるでしょう。

6世紀のユスティニアヌス一世の時には旧西ローマ帝国の領土の大部分を回復し、最大版図となり、ローマ帝国の復活と賞賛されました。また、ギリシア正教のシンボルのようになされる「聖ソフィア大聖堂」が、この時期に建設されます。また、ユスティニアヌス一世は、征服戦争のための重税に苦しむ市民の蜂起「ニカの乱」を弾圧し、専制政治を強めます。こうして次第にビザンティン帝国はかつてのローマ帝国の共和的性質の残滓すら失い、専制政治国家としての性質を強めてゆくのです。

その後継者となったカルタゴ出身のヘラクレイオス皇帝もペルシアとの戦争を戦い抜き、大々的な凱旋式を行い、専制皇帝の地位を固めました。彼の晩年、燎原りょうげんの火のように広まったイスラム勢力がビザンティン帝国にも襲いかかり、多くの領土を奪いました。しかし、イスラムのこの攻勢を辛うじて斥けたビザンティン帝国は、8～11世紀には新たな黄金時代を迎え、独自の文化や経済を育て、ビザンティン文化と呼ばれる美術や文学、建築を生み出します。キエフ大公ヴオロディミールが使節を送り、聖ソフィア大聖堂とギリシア正教の典礼の美しさに惹かれ、正教会を国の宗教として採り入れたのはまさにこの時期なのです（後述）。

しかしその後、セルジुक・トルコとの戦いに敗れ、さらに同じキリスト教の同盟軍であったはずの十字軍による略奪によってビザンティン帝国は力を失い、ついに第4回十字軍の時、ビザンティン帝国はラテン帝国を名乗る十字軍によって首都コンスタンティノポリスを奪われてしまいます。このラテン帝国は50年にわたり占領を続けますが、1261年にビザンティン皇帝ミカエル八世が十字軍を追放し、首都を取り戻します。しかし、いったん繁栄を取り戻した帝国も、次第に落日の運命を辿り、最後の一撃として加えられたオスマン軍の攻撃の前に、1453年、コンスタンティノポリスは陥落し、イスタンブールと改名されます。聖ソフィア大聖堂は、イスラムのモスクとなってしまふのです。

ここで、東ローマ帝国（ビザンティン帝国）におけるキリスト教の特徴について触れておきましょう。

### 皇帝教皇主義

コンスタンティヌス一世のもとで、キリスト教と国家は一体となり、教会は全面的に皇帝権力の下に置かれます。公会議も皇帝が招集します。キリスト教が国教化する過程から見れば当然かも知れません。しかしこれは、教会が政治的権力に翻弄される結果を招きかねません。これを皇帝教皇主義と呼びます。この体制が後にロシアの国家と教会の関係に転移することになります。

## 2

## フランク王国の発展

イコン（聖画像）というのは陶板や木版、壁に描かれた聖画のことで、礼拝に用いられます。現在でも東方正教会の礼拝堂には、たくさんのイコンが掲げられています。イコンははじめキリスト教に改宗した人々に教えたり、礼拝の意味を補助的に示したりするためにキリストの事績などを絵画として表したものです。しかし、聖書ではいかなる像も造ってはならないという教えがある（十戒）ため、イコンは偶像であるかどうかをめぐる論争が生じました。キリストの神性を強調する立場からすれば、イコンはキリストの本質を歪めるものと受け止められ、イコン破壊運動（イコノクラスム）が起こり、730年から843年まで続きましたが、女帝テオドラの決定により、イコンは受肉した（人となった）御言葉のペルソナ（位格・人格）を表すものとして認められることとなりました。

## イコン論争

## ビザンティン典礼

コンスタンティノポリス総主教座で用いられた東方典礼の代表的様式です。言語はギリシア語、教会スラブ語、その他各国語で行われます。聖体礼儀（38）は古代からの式文に基づいて行われます。信徒は礼拝中、基本的に立って参加し、パンとぶどう酒の聖別は司祭がイコノスタシス（聖障）と呼ばれる壁によって区切られた至聖所（聖堂の一番奥に位置する）の内部で行います。すべてが一様なわけではなく、各国の正教会によって、多様な展開が見られます。

西方でローマ帝国を解体したゲルマン諸民族の勢力分布は次第に変化発展しますが、その中でもフランク族の支配圏であるフランク王国がキリスト教との関係で決定的な役割を果たすこととなります。それは、メロヴィング朝のクローヴィスが496年にキリスト教に改宗するからです。しかし、それ以降の世代の国王は必ずしもキリスト教に協力的であつたわけではありませんでした。そんな中で宮廷の宰相であるカロリング家が次第に権限を持つようになり、687年にテルトリーの戦いに勝利したカロリング家のピピン二世が実権を握ります。



図6 小ピピン

ム（聖像破壊）がローマ教皇の反対を押し切ってイタリアでも進められたことに反発して、ビザンティン皇帝に代わる教会の保護者を求めていたローマ教皇にとつて、カロリング王朝は格好の相手となったのです。754年に教皇ステファヌス二世はパリ近郊のサンドニ教会において、小ピピンに「ローマ人の保護者」という称号を与えるに至りました。小ピピンはその恩返しとして、ランゴバルト族から土地を取り戻し、ラヴェンナ太守領などを教皇へ寄進しました。これが教皇領の始まりとなります。

732年にはピピン二世の子、カール・マルテルが、次第に南から北上する機会を狙っていたイスラム勢力を、トゥール・ポワティエの戦いにおいて撃退し、権力の座を固めます。その後、カール・マルテルの子、小ピピン（ピピン三世、図6）がメロヴィング朝最後のシルデリク三世を追放し、フランク王国の王位に就き、名実ともにカロリング朝の支配を固めます。ビザンティン皇帝レオ三世によつてイコノクラス